

文化力と価値創造に関する特別委員会 管内外調査

令和7年1月28日（火）～29日（水）

1 宇治市議会〔現地視察：京都宇治茶房 山本甚次郎〕（宇治市）

【調査事項】

宇治学による小中学生への文化学習・伝承の取組について

【調査目的】

京都府における地域文化の継承支援や大学等との連携による取組の参考とするため、宇治学による小中学生への文化学習・伝承の取組について調査する。

【調査内容】

宇治市では、市内全小・中学校で実施している小中一貫の特色ある教育活動として、総合的な学習の時間に「宇治で学ぶ、宇治を学ぶ、宇治のために学ぶ」をコンセプトとした「宇治学」を実施している。その内容は、児童生徒が地域社会の一員としての自覚を持ち、「ふるさと宇治」をよく知り、諸課題に対し、主体的・創造的・協働的に取り組むことで、課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質や能力を育成することを目指すものである。

2010年度の総合的な学習の時間の活用から始まり、2012年度から宇治市の小中一貫教育の目玉として位置付けられた。小学3年生から中学3年生までの7年間、年間70時間のカリキュラムで、各担任が自由に取り組めることとされたが、学校間で格差が生じたことなどから京都文教大学に副読本の作成を依頼し、各学年の重点単元として、小学3年生は「宇治茶」、4年生は「自然」、5年生は「福祉」、6年生は「歴史・観光」、中学1年生は「防災」、2年生は「キャリア教育」、3年生は「宇治市への提言」と設定された。端緒となる宇治茶の学びについては、地元の生産者から茶葉の提供などの授業協力が行われており、お茶を飲む学習や生産現場・工場の見学も用意されている。

また、1848年（嘉永元年）に建てられた築170年の店舗兼住宅で「国選定重要文化的景観」に指定されている「宇治茶茶房 山本甚次郎」において、独特の芳香とまろやかで豊潤な風味を併せ持つ貴重なお茶ができる「本ず栽培」や、副読本でも紹介されているお茶を乾燥させる現役で最古の「堀井式碾茶乾燥炉」を用いた宇治茶の生産工程について説明を受けた。宇治においても茶園は減少傾向にあり、後継者が連携して守っていくうえでも宇治茶に関する地域の理解を醸成する宇治学は重要と説明があった。

これからも、探究的な学びから課題解決学習を進め、さらに地域社会との絆を作る文化を活用した学習をさらに進めていくとのことであった。

【主な質問事項】

- ・宇治学の取組成果について
- ・地元住民との関わりについて

など



調査事項を聴取



現地視察

2 敦賀市議会（福井県敦賀市）

【調査事項】

和食文化を支える「敦賀昆布ストーリー」創出・発信事業について

【調査目的】

京都府における和食文化振興の取組の参考とするため、敦賀市における和食文化を支える「敦賀昆布ストーリー」創出・発信事業について調査する。

【調査内容】

敦賀市は、福井県のほぼ中央に位置し、平安時代以前から大陸との窓口として、また、日本海を北前船が行き来した時代には、「京」や「大坂」の玄関口として栄えた都市であり、令和6年3月北陸新幹線敦賀駅が開業したところでもある。

敦賀は、古来から日本海に面した物流拠点として栄えていたが、流通商品の中でも蝦夷地方（北海道）から運ばれた昆布は、都への献上品であり、当地で加工することにより料理用から菓子用まで様々な商品が作られてきた。中でもおぼろ昆布は、酢に浸し、柔らかくして特殊な包丁で削ってつくる商品で、見た目は透けるように薄く、口の中で溶けるような食感が特徴で、職人の手により一枚ずつ丁寧に削られている。

市では、全国の80%のおぼろ昆布が生産されており、200人ほどの昆布職人が伝統の技で生産しているが、職人数の減少・高齢化が進行しており、産業自体が廃絶の危機にある。

そのため、職人と協力したおぼろ昆布の手すき体験を行うほか、令和4年度文化庁の「食文化ストーリー」創出・発信モデル事業の採択を受け、パリでのPRなど認知の向上に取り組んだ。しかしながら、外国人は強い酢の匂いに抵抗があることや見た目が食べ物に見えないといった意見があるなど、海外展開には、課題が残った。

今後の展開として、おぼろ昆布の生産は、文化財保護の観点だけではなく、産業として維持していくために、新規就労者へ助成する後継者育成支援や、原材料仕入れ等に助成する生産活動支援、食材利用促進などを進めていく必要があると考えている。

こうした中、令和7年1月に開催された国の文化審議会において、敦賀市特産の「おぼろ昆布」を作る際に、職人が専用の刃物で巧みに昆布を薄く削る伝統的な製造技術が評価され、無形民俗文化財として新たに登録するよう文部科学大臣に答申された。答申どおり登録されれば福井県では初、全国では8件目の登録となる。

今後もおぼろ昆布について文化財としての保護と産業政策を組み合わせる取組を推進していくとのことであった。

【主な質問事項】

- ・職人の雇用形態や収入について
- ・海外展開の反応について

など



調査事項を聴取

3 金沢市議会〔於：金沢 21 世紀美術館〕（石川県金沢市）

【調査事項】

金沢 21 世紀美術館ミュージアム・クルーズ事業について

【調査目的】

京都府における文化振興の取組の参考とするため、金沢市における金沢21世紀美術館ミュージアム・クルーズ事業について調査する。

【調査内容】

金沢21世紀美術館は、金沢市が金沢城周辺のエリアに整備した現代アートの美術館として、2004年10月に開館して以来、集客力は国内トップクラスで、近年の美術館の集客ランキングではベスト3にランクインしている。

コンセプトは、①「世界の『現在（いま）』とともに生きる美術館」、②「まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館」、③「地域の伝統を未来につなげ、世界に開く美術館」、④「子どもたちとともに、成長する美術館」の4つであり、④の目標に関連して、「見て」、「触れて」、「体験できる」最適な環境の提供と、子どもの成長とともに美術館も進化し、時代を超えて成長することを目指している。

美術館は、展示作品のある屋外エリアと館内の交流ゾーンは無料で解放しており、市民の交流などの場としても利用できるほか、芸術・文化に関する教室も開催されている。平日に小さな子ども連れで美術館を楽しめるスペースを整備したり、休日には、小学生たちも素材に触れ、作品を制作することを楽しめるイベントも開催される。

11月2日から約4か月かけて、特別プログラムとして「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」が行われ、金沢市内の小学校・中学校・養護学校等全95校の全児童4万人余りが招待された。この事業は、翌年からは子どもたちに対する教育普及活動として、小学4年生を対象に「ミュージアム・クルーズ」として継続されている。五感を通して作品に出会い、触れ合うことで、子どもたちの感受性や創造性、自主性や思考力、表現力等を育むとともに想像力とコミュニケーション力を育てることが目的で、美術館における文化体験を学校教育に生かすことで、子どもたちの“感じる心”をより効果的に育てることができ、これまでに11万人を超える小学生が参加している。

市民ボランティアの協力により運営され、事前学習をしたボランティアがガイドマップを用いて行われている。既に20年が経過したことから、当初の参加者が今は市民ボランティアとして参加するなど、世代を超えた市民参加の運用が定着しており、今後もこうした事業をさらにバージョンアップしながら継続させていくとのことであった。

【主な質問事項】

- ・入館者数等について
- ・入館料収入について
- ・展示企画と他の文化施設との連携について など



調査事項を聴取



施設視察

4 石川県議会〔於：いしかわ生活工芸ミュージアム〕（石川県金沢市）

【調査事項】

石川県の伝統文化の普及・啓発、伝承の取組について

【調査目的】

京都府における伝統文化振興の取組の参考とするため、石川県の伝統文化の普及・啓発・伝承の取組について調査する。

【調査内容】

石川県が設置した「いしかわ生活工芸ミュージアム」は、県の伝統工芸品を収集した博物館で、兼六園に隣接している。ミュージアム内には、経済産業省指定の伝統的工芸品10種を含む36業種の作品が展示紹介されており、九谷焼等いくつかの工芸品では、製作工程がわかる展示となっている。展示は「衣・食・住・祈・遊・音・祭」に分かれており、伝統と今を結ぶ新しい生活提案も行われている。展示以外にも、工芸品ワークショップや企画展示、コンサート、セミナーなどが開催されている。

令和2年に東京から同館付近に移転した国立工芸館と区別するため、同年4月から、通称を石川県立伝統産業工芸館から「いしかわ生活工芸ミュージアム」に変更した。

令和5年度の年間入館者数は、兼六園が2,140,462人、金沢21世紀美術館が1,974,773人、ミュージアムは、90,938人で、金沢城周辺の文化エリアとして、一体的に観光客等が利用していることを示している。また、隣接する兼六園側にも入口を整備していることも利用者が多い要因である。

ミュージアム入口には、県内の全伝統工芸士の名前を示す木札があり、また、展示品には、購入できるよう値札がつけられている。購入者は、インバウンド客だけでなく、国内観光客も多く、ミュージアムの手数料収入が10%で約1千万円くらいであることから、1億円以上の売り上げとなっている。

伝統工芸に関わる人材育成支援については、金沢市内の産業は金沢市が、それ以外は県が中心に支援している。

今後も、石川県の生活工芸情報の発信や情報提供、また、ワークショップの開催による体験機会の提供に努めていくとのことであった。

【主な質問事項】

- ・ 兼六園との連携について
- ・ 職人育成に関する県と市の役割分担について
- ・ 展示物の販売状況について など



調査事項を聴取



施設視察